

朝を
ひらく

人間死んだらどうなるのだろうか。果たして天国へ行くのか、それとも地獄へむかうのか……？ 私の場合、それについて何も深く考える必要はなかった。人間は死んだらお骨になる。それ以外の答えは、幼年時代から今に至るまで思いつかない。

生まれ育ったのが、数千のお墓に囲まれた禅寺。本堂の片隅にはいつも誰かのお骨があった。無縁のお骨、納骨を待つお骨、私が生まれ育ったこの環境の中で、お骨たちはただ空気のよう存在した。

夏の季節、恒例の墓掃除が始まる。4千の墳墓がある広大な

人生の締め切り

永田 円了
真国寺住職



墓地の清掃は夏の一大行事だった。小学生だった私も作業に加わった。

「おおい、こっちへこいよ。おもしろいものがあるぞ」。年上のバイト少年が呼んだ。6畳間ぐらいの墓台下に何かを見つけたらしい。高さが2センチぐらいの石垣できていてその墳墓は、中が地下室のようになっていた。上のコンクリート台を数人でずらすと中がよく見える。皆が息をのんだ。

生きる 死あつてこそ

中にはいくつもの人骨が、人体そのままの形で横たわっている。一人が竹の熊手をのぼして頭蓋骨の部分を引っ掛けようとした。なかなかうまく引っかからない。やっとしゃれこうべの眼のくぼみに熊手の先が引っかかった。ゆっくり引き上げる。頭部は思ったより小さかった。少年たちは無言のままその頭蓋骨を見つめた。だれもそれ以上のことをしようとはしなかった。

私はそのしゃれこうべを両手で抱きかかえるようにした。少し手に力を入れると砕けそうになる。思わず手を離すと、それは下に落ち、いくつかの破片になって砕けた……。

お寺で生まれ育って有り難いと思うことは、どんな偉い人も

いつかは必ずお骨になる、と知ったことである。一本の線香の煙が、十数秒真つすぐにのびた後、揺らぎながら消えてゆく。亡くなった人にお化粧をして、あたかも生きている人を見送るような習慣が日本でも当たり前になったのは、いつごろからだろうか。「死」というイメージをなるべく無くしたいということなのか。

つい反発したくなってしま

う。なぜしつかり死と向き合おうとしないのか。私は人の死というものは、やはり目を見開いて、ありのままの姿で見送る必要があるように思う。死という人生の締め切りがあつて初めて、生きるという作品が生まれるのだから。

住職になつてもまもなく、寺の前に永代供養墓を建てた。墓石には迷うことなく「生きる」と刻んだ。